

シャルトル大聖堂におけるステンド・グラスの 配置に関する試論

——分節システムと幾何学的構成の観点から——

木 俣 元 一

はじめに

1. 内陣集歩廊と放射状祭室の窓

2. 外陣側廊の窓

おわりに

はじめに

シャルトル大聖堂の地階レベルの窓は、一見したところきわめて多様な幾何学的構成を示すが、実際には、大きく分けて二つのタイプ(A, B)の分節システム（すなわち、幾何学的構成を成り立たせている分節的要素のあり方）、あるいはそこに両者の中間的なタイプ(C)を含めて三つの分節システムに分類できることをすでに明らかにした⁽¹⁾。さらに、それぞれの分節システムのタイプにより、実現された幾何学的構成が、表面的には多様であるにも関わらず、実際にはかなり限られた数のパターンへとまとめられることも別の論文で述べた⁽²⁾。また、分節システムとステンド・グラスのクロノロジーの関連を論じた別の論考では、こうした分節システムの諸タイプの間には年代的前後関係、発展的派生関係、そして審美的優劣関係を見いだそうとする従来の研究に批判的見解を述べ、これらに代わるべき説明のモデルをいくつか提出した⁽³⁾。

本稿では、この論考を継続するものとして、とりわけシャルトル大聖堂の地階レベルにおける建築内部での窓の配置とステンド・グラスの分節システムの諸タイプとの関連性を考えることにしたい。ただし、これまでの研究、とくにフランクルのそれ⁽⁴⁾のように、大聖堂の建築が東から西へ向けて建造が進められたという仮説の傍証としてステンド・グラスの分節システム、およびそれによって成り立つ幾何学的構成の差異を捉えるのではない。フランクルの場合、シャルトル大聖堂の内部に限定された、分節システムの自律的展開が前提となっており、それぞれの窓（ここではその主題内容を捨象した構成やデザインが問題となるのだが）の建築内部での配置は、建築工事の進捗状況との関連で決定されることになる。しかし、まず、この前提そのものについては、すでに筆者が批判した⁽⁵⁾。すなわち、シャルトル大聖堂の地階のステンド・グラスが作成されたと考えられている一三世紀初頭の段階で、分節システムの諸タイ

ブは、一二世紀中期以降、シャルトル周辺の、シャルトルと関連するモニュメントで成立し、すでに長い伝統をそなえており、シャルトルのステンド・グラス制作者たちは、これらの分節システムの諸タイプを十全に使いこなすことができたのである。そして、本稿では、建築の進捗状況との関連で、いわば偶然に決定されたと考えられていた窓の配置が、かなりの程度の規則性を示しており、建造の当初から、あるいは少なくともステンド・グラスを制作し設置していった時点から意図的に配慮されていたことを論証したい。

以下、(1)内陣周歩廊と祭室の窓、(2)外陣南側廊の窓、(3)外陣北側廊の窓という三つの窓のグループに分け、そのそれぞれについて考察してゆく。

1. 内陣周歩廊と放射状祭室の窓

シャルトルの内陣周歩廊には、五つの放射状祭室があり、そのうち東端部の三つの祭室には各々五つずつの窓、そして周歩廊の南北両端に位置する二つの祭室には各々三つの窓がはめられている (fig. 1a, 1b)。

まず、周歩廊東端部中央の祭室(pl. 1)には図像表現をともなう(すなわちグリザイユによる装飾文様だけをあしらったものではない)四つの窓が現存するが、それらはすべてグリッド状の鉄枠を用いた分節システム(A)を示す(no. 0,1,2,4; なお、本稿では、筆者による他の論文同様、窓および開口部のナンバリングはすべて *Corpus vitrearum* によるナンバリング・システムによる) (fig. 1a, 1b)。残る一つの窓(no. 3)は、ドラポルトによれば、一三世紀末にグリザイユの窓にはめ替えられたが⁶、現在残る鉄枠はグリッド状の鉄枠を示す。ただし、この鉄枠はグリザイユで描き出される文様との関連でデザインが決定されているように思われるため、当初のものをそのまま再利用しているとは考えられない⁷。したがって、この窓は考察の対象から外す。

さらに、東端部北側の祭室(pl. 2)には五つの窓すべてが現存するが、その中で祭室中央の窓(no. 13)だけが鉄枠の形状とガラス・レヴェルでの場面の区画の形状とが一致するタイプの分節システム(B)を採用しており、その他の四つの窓ではグリッド状の鉄枠(A)が用いられている(no. 9,11,15,17)。

また、東端部南側の祭室(pl. 3)には四つの図像表現をともなう窓が現存するが、中央の窓(no. 14)に中間的タイプの分節システム(C)が見られる他は、グリッド状の鉄枠(A)が使用されている。残る一つの窓(no. 10)は、一三世紀末にグリザイユの窓に替えられたが、上述の別の窓(no. 3)と同様に、グリッド状の鉄枠を示すけれども、当初のものを再利用しているとは思われない。それゆえ、この窓は考察の対象外とする。

これら三つの祭室の間の周歩廊外壁に配される窓(pl. 4,5)は、南北でそれぞれ二つずつ、計四つあるが、そのうち三つが現存し、それらはすべて鉄枠の形状とガラス・レヴェルでの場面の区画の形状が一致するタイプの分節システム(B)を用いている(no. 5,7,8)。残る一つの窓

(no. 6)は、一四世紀中頃にグリザイユの窓に取り換えられた⁸。一三世紀当初において、現在見られるようなグリッド状の鉄枠が使用されていたかどうかは現在不明である。したがって、この窓は考察から除外する。

周歩廊の南北両端部の二つの祭室のうち、北側のもの(pl. 6)は、当初三つの窓をそなえていたが、そのうち二つが現存し、それらは二つとも鉄枠の形状とガラス・レヴェルでの場面の区画の形状が一致するタイプの分節システム(B)を用いている(no. 21, 23)。もう一つの窓(no. 19)には、一三世紀中頃あるいは後半に制作されたグリザイユがはめられている。この窓も考察から除外する。

最後に南側の祭室(pl. 7)の三つの窓のうち一つが現存し、それは鉄枠とガラス・レヴェルでの場面の形状が一致する(B)(no. 20)。残る二つ(no. 22, 24)は、一六世紀末にグリザイユのパネルと入れ替えられたが、一三世紀初頭当初の枠が残っている⁹。一つは中間的タイプの分節システム(C)を示し(no. 22)、もう一つは鉄枠とガラス・レヴェルでの場面の形状が一致するタイプ(B)である(no. 24)。これら二つの窓については、ここでの考察の対象に含めることにする。

以上のように、周歩廊とその祭室の窓に関しては、総計で二四を数える窓のうち、四つは考察から除外しなければならないが、残りの二〇の窓(すなわち八三パーセントに相当する)に採用された分節システムから次のような推論を行なうことができる(fig. 1a, 1b)。

まずいえることは、それぞれの祭室の内部に置いては、窓に使用される分節システムは、左右相称の位置関係で配分が決定されていることである。東端部中央の祭室ではすべての窓にグリッド状の鉄枠(A)が使用されていた。そして、その左右の祭室については、北側の祭室では、中央の窓に鉄枠とガラス・レヴェルの場面の形状が一致するタイプ(B)が見られる以外、他の窓にはグリッド状の鉄枠(A)が使用され、南側の祭室では、中央の窓に中間的タイプが見られる以外、他の窓にはグリッド状の鉄枠が用いられている。さらに、周歩廊南北両端の祭室のうち、北側ではおそらくすべてに一致するタイプの分節システム(B)が採用されていたと推定できる。そして南側では、中央の窓に中間的タイプ(C)が使われている他は、左右の窓には一致するタイプの分節システム(B)が見られる。

このように、左右相称に分節システムを配分する発想の例としては、シャルトル大聖堂とほぼ同時期(一二一〇年から一二一五年)に制作された、ラン Laon 大聖堂内陣の三つのランセット窓を挙げることができる(pl. 8)。ここでは、中央の窓に、一致するタイプ(B)、左右の二つの窓にグリッド状の鉄枠(A)が採用されている。ここでもシャルトルと同様、左右の窓にはグリッド状の鉄枠が使用されていることに注目したい。

再びシャルトルに戻る。周歩廊の祭室以外の外壁の窓には、現存する窓から推定して、当初はすべての窓において、一致するタイプの分節システム(B)が用いられていたに違いない。したがって、no. 6の窓にはこのタイプの分節システムが当初は配置されていたと思われる。ブ

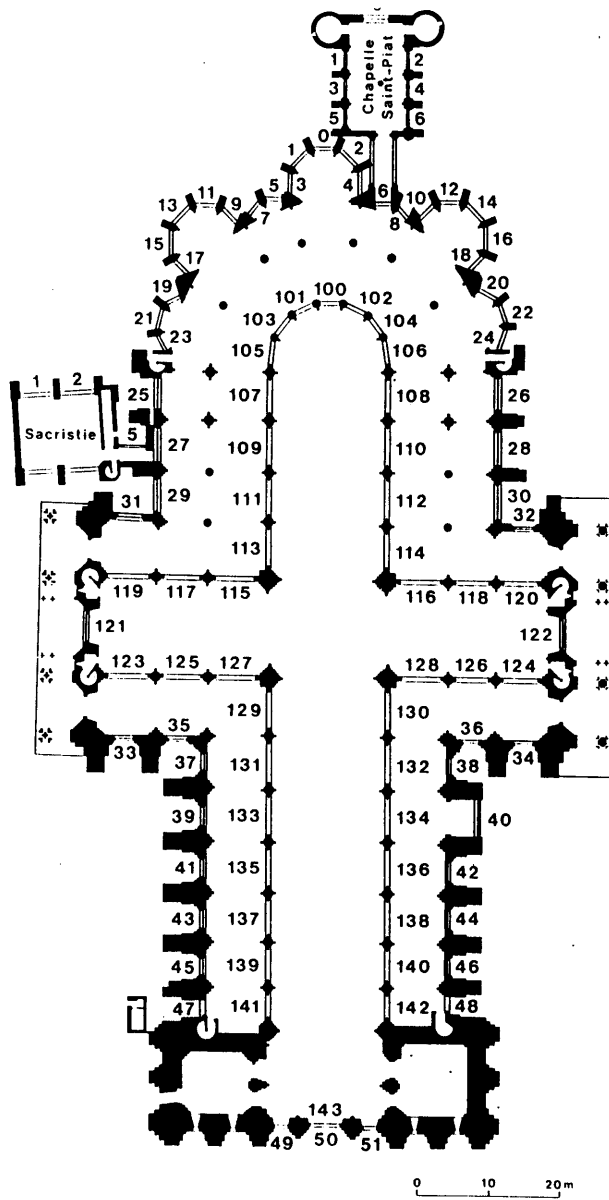


fig. 1a : シャトル大聖堂の窓のナンバリング
(Corpus vitrearumによる)

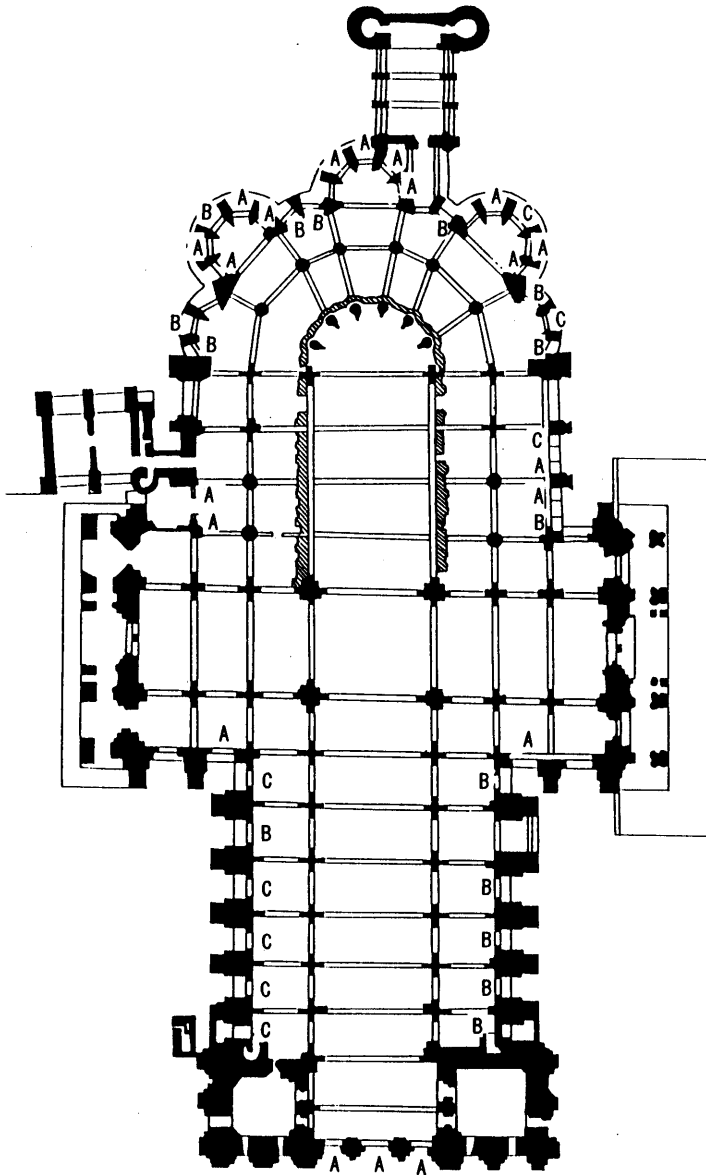


fig. 1b : シャルトル大聖堂地階レベルにおけるステンド・ガラスの分節システム配置
 (A : グリッド状の鉄枠をしようするタイプ, B : 鉄枠の形状とガラス・レベルでの区画の形状が一致するタイプ, C : 中間的タイプ)

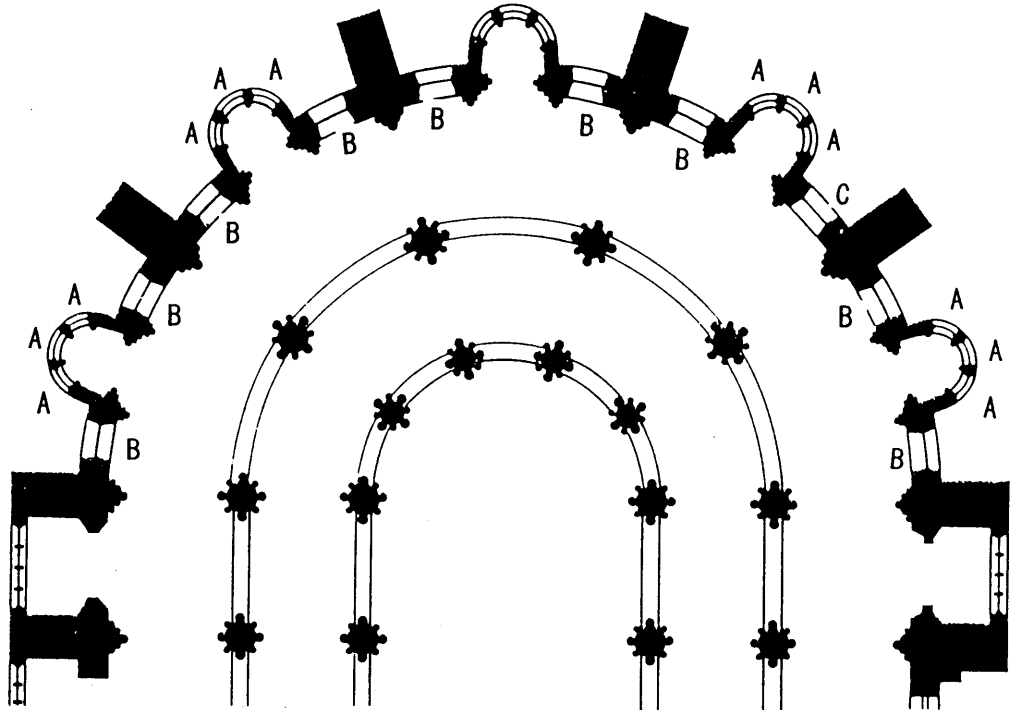


fig. 2: ブールジュ Bourges 大聖堂の内陣周歩廊ステンド・ガラスの分節システム配置
 (A: グリッド状の鉄枠をしようするタイプ, B: 鉄枠の形状とガラス・レベルでの区画の形状が一致するタイプ, C: 中間的タイプ)

ールジュ Bourges 大聖堂の内陣周歩廊においても、祭室以外の外壁の窓には、十の窓のうち九つに一致するタイプの分節システム(B)が採用されている(残る一つの窓には中間的タイプ(C)を使用)ことを考えるならば、この推定はかなり確かなものであろう(fig. 2)。

次に、内陣周歩廊全体を視野に入れると、分節システムの配分が全体で左右相称な位置関係を示すことが認識できる。ただし、no. 13と21の窓では一致するタイプ(B)であるのに対し、no. 14と22では中間的タイプ(C)が使用されているという違いはある。三つの分節システムのタイプのうち、グリッド状の鉄枠(A)を用いるものと、それ以外の二つ(B, C)とがはっきりと区分されていることは明らかである。これら両者の視覚的効果が、一見して明瞭に異なることについてはすでに記述したが⁽¹⁰⁾、一三世紀初頭の時点でも、こうした視覚的効果の相違は明確に意識されていたと考えられる。そして、一致するタイプ(B)と中間的タイプ(C)とを同じシステムの変種と考えれば、内陣周歩廊全体について、窓の分節システムに関して意識的に構成が考えられたといえる。

シャルトルとほぼ同時代の、ブールジュ大聖堂の内陣周歩廊を、比較のために再び取り上げてみよう(fig. 2)。ここでは、すでに述べたように、周歩廊の外壁の窓には、十の窓のうち九

つまでもが一致するタイプ(B)であり、残りの一つだけが中間的タイプ(C)を用いている。これに対して、放射状祭室では、東端部中央の祭室が後補であるので考察対象から除外すると、その他の十二の窓すべてにグリッド状の鉄枠(A)が使用されている。この例からも、三分節システムのタイプのうち、グリッド状の鉄枠(A)を使用するものと、それ以外の二つ(B, C)とが、建築の与える部位に応じて、明瞭に使い分けられていることが確認できる。また、シャルトルと比べると単純かもしれないが、ここでも内陣周歩廊全体を、ステンド・ガラスの分節システムを利用して、組織的にデザインしようとする意図がはっきりと認識できるように思われる。

ところで、シャルトルの内陣周歩廊全体の窓における分節システムの配分が上述の通りであるとする、東端部では圧倒的にグリッド状の鉄枠(A)が使用されているのが、東端部から西へ向かって、少しずつ他のタイプの分節システム(B, C)が増えてゆく。そして、第二章、第三章で論じるが、外陣側廊においては、圧倒的な数の窓に、一致するタイプ(B)と中間的タイプ(C)が採用されている。このために、フランクフルトは、大聖堂の建築の相対的クロノロジーと分節システムとを関連させようとしたのである。しかし、本稿の考察により、内陣集歩廊については、あるシステムから別のシステムへの発展ないし移行の痕跡を偶発的にとどめているというよりも、実際には意図的な配置の結果であると解釈すべきであることが明らかとなった。

それでは、どのような理由から、東端部から西へ向けて分節システムの配分を変化させていったのだろうか。この問いには推測の形でしか答えられないが、おそらく西正面扉口上方にある、一二世紀中期に制作された三つの窓(no. 49, 50, 51) (pl. 9)に見られる、グリッド状鉄枠を用いる分節システム(A)に呼应し、それを尊重しようとする配慮が根底にあったのではないだろうか。一一九四年の火災後、西正面に残された過去の大聖堂の聖遺物ともいえるべき一二世紀中期の建築、彫刻、ステンド・ガラスを、新たに再建される大聖堂に組み込みながら、大聖堂全体の東西方向の軸線上で対応する位置関係にある、西正面と内陣の中央の祭室とを、デザインの統一しようとしたのではないだろうか。

ここで、シャルトル大聖堂の内陣周歩廊とその放射状祭室の窓における分節システムの配分についてまとめてみよう。まず、個々の祭室については、それぞれを単位として一つのまとまりを作り出すように、東端部の三つの祭室では、中央の祭室を除外して、祭室の中央に位置する窓には一致するタイプ(B)あるいは中間的タイプ(C)、そしてそれを囲む窓にはグリッド状の鉄枠(A)と、異なったシステムを配して、個々の祭室の中で左右相称の関係を作り出している。また、これらの祭室の窓と通路の壁面の窓とを区別するために、通路の窓には一致するタイプ(B) (ただしno. 6は中間的タイプ(C)であったかも知れない)を配して、祭室の端に位置するグリッド状の鉄枠(A)との差異を際立たせている。そして、東端部の三つの祭室のうち南北の端に位置するものに接する、内陣周歩廊南北両端の小祭室では、すべての窓に一致するタイプか中間的タイプ(C)を用い、互いに接する祭室間の区分を明確にしている。以上のような、

個別的部位における意図的な配置は、内陣周歩廊全体として見ても、一貫した意図に裏付けられており、全体として左右相称の配置を示すのみならず、グリッド状の鉄柵(A)を用いる窓が集中する内陣東端部から、一致するタイプ(B)や中間的タイプ(C)だけが見られる外陣側廊への段階的移行をシステマティックに行なっている。

上述した内陣の周歩廊と交差廊との間に位置する側廊の窓、そして交差廊の窓に関しては、グリザイユの窓が多く含まれており、また配置に関する何らかの意図や規則性を論じるには不十分な数の窓しか現存しないため、本稿では考察の対象として扱わないことにする。

ただ最後に、外陣側廊の窓に移る前に、現在南袖廊西壁面にある一つの窓(no. 36)について、その当初の位置に関する仮説を述べておこう。この窓は、グリッド状の鉄柵(A)によりパネルが固定されているが、窓の外縁部を縁取る帯状の部分をさらに外側から囲む帯が新たに付け加えられており、当初は現在の位置ではなく、ひとまわり小さい開口部にはめられていたと考えられる。フランクルは、この窓が当初は内陣北側廊の一つのベイ(no. 27)の二つの開口部のいずれかにあったと推定している⁽¹¹⁾。しかし、この推定を受け入れるためには、いくつか問題が残る。一つは、フランクルが、この窓を内陣北側廊の開口部に当てはめるため後補によるとした外縁部の帯状部分の幅が大きすぎ、当初からあったと考えられる部分までもそこに含めていること。もう一つは、高さの点で、当初は内陣北側廊のこの開口部(no. 27)にあったとするには大きすぎるといえる⁽¹²⁾。そして、no. 27を含めて、内陣の側廊部の他の開口部(no. 25,26,28,29,30)のいずれとも、高さの点で適合しない。

この窓の高さの復元は、現在は最初の部分が欠落している「聖アポリナリス伝」が、当初はいくつかの場面をそなえていたかによる。例えば「聖パンタレオ伝」の窓(no. 11)のような構成であったとすると、現在は一三二八年の年号を呈する銘文を含むグリザイユがはめられている部分に、二段分の計六場面があったと推定できる⁽¹³⁾。もしそうであったとするならば、例えば内陣周歩廊の現在はグリザイユの窓がはめられている二つの開口部(no. 3,10)のどちらかに、この窓があった可能性を考えることができる。この窓がこれらの開口部のいずれにあったとしても、ここで述べたような内陣周歩廊における分節システムの配置の規則性との間に問題を生じないということ。そして、内陣の側廊部のどの開口部とも、高さの点で適合せず、また、外陣側廊の開口部にはすべて当初のステンド・グラスがはまっており、交差廊の窓は幅の点で適合しないことから、この窓の当初の設置位置を内陣集歩廊に求めるほかないということ。この二点から、この推定がかなりの確実性をそなえたものであるといえることができる。

2. 外陣側廊の窓

外陣側廊(pl. 10,11)では、すべての窓に、一致するタイプ(B)か中間的タイプ(C)のいずれかの分節システムが使用されている⁽¹⁴⁾。このこと自体にも、窓の配置に関する意図的な配慮

を見いだすことができる。すなわち、こうした統一性への強い志向により、大聖堂全体の中で外陣部分を独立し一貫した部分として扱おうとしていることが明瞭となる。しかしさらに、外陣側廊の窓を、南北の二つのグループへと大きく分けることができるように思われる。以下、これらのグループのそれぞれについて述べてゆこう。

(1) 外陣南側廊の窓

外陣南側廊(pl. 10)では、五つの窓すべてに一致するタイプの分節システム(B)が用いられている(no. 38,42,44,46,48)。そのため、幾何学的構成の点では確かに多様であるにも関わらず、視覚的効果の点で与えられる統一性の効果はきわめて大きい⁽¹⁵⁾。言い換えれば、分節システムのレベルでは統一性が、そして幾何学的構成のレベルでは多様性が追求されている。したがって、建築における窓の配置に関する意図は、内陣集歩廊と放射状祭室のそれとは大きく異なっていることになる。内陣集歩廊では、祭室という個別的な単位ごとの完結性、軸性(左右相称性)が強調されていたのに対し、外陣南側廊では、全体としての統一性と、その枠組の中での多様性に注意が向けられているといえよう。こうした意図の相違は、二つの建築的空間の質の相違に対応している。すなわち、大きく円を描いて湾曲し、全体を見通したり見渡したりすることができず、また祭室という礼拝や儀式における中心点を極地的に分散して配した周歩廊では、各部分の中心性の表出や諸部分間の区分に重心がおかれる。これに対して、一種の連続した平坦な空間である外陣側廊では、全体としての統一感の表現が求められる。

(2) 外陣北側廊の窓

外陣北側廊(pl. 11)の窓に関しても、南側廊について行なったのと同様の指摘をすることができる。ただしここでは、中間的なタイプの分節システム(C)が、一致するタイプ(B)による一つの窓(no. 39)を除いて、ほとんどの窓に見られる(no. 37,41,43,45,47)。こうした現象は、視覚的な効果の点で、グリッド状の鉄枠(A)を用いるタイプと、その他の二つ(B, C)を区別するだけでなく、鉄枠の形状とガラス・レベルでの区画の形状が一致するタイプ(B)と中間的タイプ(C)の間でも区別が行なわれていたと考えるように促す。

おわりに

以上の考察から、シャルトル大聖堂地階レベルのステンド・ガラスは、幾何学的構成を成り立たせている分節システムの点で、意図的に窓の配置を考えていたことが明らかとなった。これは、逆に、筆者の考える分節システムの諸タイプへの分類(A, B, C)が、現代のわれわれの目にとってのみ有効性をそなえているのではなく、一三世紀初頭の人々にとっても同様であったことを証明してくれる。

ここでの考察は、窓が表現する物語の内容や寓意的内容とは別の水準に属する視覚的効果を

中心としたものであったが、シャルトル大聖堂全体におけるステンド・グラスの図像プログラム⁽¹⁶⁾について考える上でも何らかのヒントを与えてくれるのではないだろうか。なるほど確かに、内陣周歩廊全体で左右相称をなすよう分節システムの配分が考えられているとしても、やはり個々の部分での配置も重視されていた。同じく、図像的内容に関しても、例えば大聖堂の東西の軸線に対して対象の位置関係にあるような、遠く離れた窓の間の関連性だけを考えるよりも、むしろ近接して並ぶ窓の間の関連性も考えるべきではないだろうか⁽¹⁷⁾。側廊や周歩廊を歩みながらステンド・グラスを見る人々にとっては、明らかに近接して並ぶ窓相互の関連性の方がずっと認識しやすく、効果的なのである。

注

- (1) : 木俣1994c.
 (2) : 木俣1995b.
 (3) : 「シャルトル大聖堂のステンド・グラスにおける分節システムとクロノロジー：今後の研究に向けての覚え書き」『名古屋大学文学部研究論集』123(1995), pp. 197-215.
 (4) : FRANKL 1963.
 (5) : 木俣1995, pp. 205-206.
 (6) : DELAPORTE 1926, p. 18, 137.
 (7) : とくに、窓の最下部の区画の上下の幅は、その上の他の区画の半分となっているが、これはそこにはめ込まれる文様の意匠によって決まっている。
 (8) : DELAPORTE 1926, p. 282.
 (9) : DELAPORTE 1926, pp. 239-241.
 (10) : 木俣1994c, p. 29-34.
 (11) : FRANKL 1963, pp. 311-312; VAN DER MEULEN 1967, p. 169.
 (12) : 内陣北側廊の開口部no. 27では、右のランセット窓の高さは748cm、左のランセット窓の高さは753cmである。no. 36の窓は、現状で高さが835cmある。「聖アポリナリス伝」の最初の部分に少なくとも一段分(三場面)が当初はあったことは確実と思われるので、その下の一段分を差し引いても、780cm前後としかならない。
 (13) : 最初の二場面、あるいは三場面には、「寄進者像」とされるようなさまざまな職業の人々の姿が描かれていたと思われる。その他の場面には、聖ペテロからラヴェンナの市民を改宗させるよう使命を授かる場面などが描かれていたと考えられる(cf. DELAPORTE 1926, p. 196)。
 (14) : ただし、一四一五年頃、ルイ・ド・ブルボンによって、南側廊に新たに付加された祭室の窓(no. 40)は除く。
 (15) : このタイプの分節システムの視覚的効果に関しては、cf. 木俣1994c, p. 33.
 (16) : cf. Kemp 1987, n. III, 46(p. 320); MANHES-DEREMBLE 1993, pp. 37-73.
 (17) : 筆者は、「放蕩息子の譬え話」の窓(no. 35)を扱った論文(1996年秋刊行予定)の中で、この窓に近接する窓との関連性を考えている。

本稿で使用した主な参考文献

- CAVINESS, Madeline Harrison, *The Early Stained Glass of Canterbury Cathedral*, Princeton, 1977.
- DELAPORTE, Yves, HOUVET, Etienne, *Les vitraux de la Cathédrale de Chartres*, Chartres, 1926.
- DELAPORTE, Yves, "Remarques sur la chronologie de la cathédrale de Chartres," in: *Mémoires de la Société archéologique d'Eure-et-Loir*, 21 (1959), pp. 299-320.
- DEREMBLE, Jean-Paul., MANHES, Colette, *Les vitraux légendaire de Chartres*, Paris, 1988.
- FRANKL, Paul, "The Chronology of the Stained Glass in Chartres Cathedral," in: *Art Bulletin*, 45 (1963), pp. 301-22.
- FRANKL, Paul, "Reconsideration on the Chronology of Chartres Cathedral," in: *Art Bulletin*, 43 (1961), pp. 51-58.
- GRODECKI, Louis, "A Stained Glass 'Atelier' of the XIIIth Century. A Study of the Windows in the Cathedrals of Bourges, Chartres and Poitiers," in: *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 11 (1948), pp. 87-111. (*Le moyen âge retrouvé*, vol.1, Paris, 1986, pp. 437-476に再録)
- GRODECKI, Louis, "Le vitrail et l'architecture au XIIe et au XIIIe siècle," in: *Gazette des Beaux-Arts*, 33 (1949), pp. 5-24. (*Le moyen âge retrouvé*, vol.2, Paris, 1991, pp. 121-138に再録)
- GRODECKI, Louis, "The Transept Portals of Chartres Cathedral: The Date of Their Construction according to Archaeological Data," in: *Art Bulletin*, 33 (1951), pp. 156-64. (*Le moyen âge retrouvé*, vol.2, Paris, 1991, pp. 49-65に再録)
- GRODECKI, Louis, "La restauration des vitraux du XIIe siècle provenant de la cathédrale de Châlons-sur-Marne," in: *Mémoires de la Société d'agriculture, commerce, sciences et arts du département de la Marne*, 28 (1954), pp. 323-352. (*Le moyen âge retrouvé*, vol.1, Paris, 1986, pp. 291-324に再録)
- GRODECKI, Louis, "Chronologie de la cathédrale de Chartres," in: *Bulletin monumental*, 116 (1958), pp.91-119. (*Le moyen âge retrouvé*, vol.2, Paris, 1991, pp. 67-89に再録)
- GRODECKI, Louis, "Chronologie des vitraux de Chartres," in: *Bulletin monumental*, 122 (1964), pp. 99-103.
- GRODECKI, Louis, *Les vitraux de Saint-Denis. Etude sur le vitrail au XIIe siècle*, vol.I, Corpus vitrearum, France, série études, I, Paris, 1976.
- GRODECKI, Louis, *Le vitrail roman*, Fribourg, 1977.
- GRODECKI, Louis, BRISAC, Catherine, *Le vitrail gothique*, Fribourg, 1984.
- KEMP, Wolfgang, *Sermo Corporeus. Die Erzählung der mittelalterlichen Glasfenster*, München, 1987.
- 木俣元一「シャルトル大聖堂, 使徒トマスのステンド・グラス: 物語表現の諸相」『インド学・密教学研究: 宮坂宥勝博士古希記念論文集』法蔵館 1993年, pp. 1349-1386.
- 木俣元一「ゴシックのステンド・グラスを読む」『民族藝術』10 (1994a), pp. 51-61.
- 木俣元一「シャルトル大聖堂地階のステンド・グラスにおける幾何学的構成と分節システム: カタログ」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』10 (1994b), pp. 79-101.
- 木俣元一「シャルトル大聖堂におけるステンド・グラスの分節システム」『美学美術史研究論集』12 (1994c), pp. 23-40.
- 木俣元一「シャルトル大聖堂のステンド・グラスにおける分節システムとクロノロジー: 今後の研究に向けての覚え書き」『名古屋大学文学部研究論集』123 (1995a), pp. 197-215.
- 木俣元一「ステンド・グラスの幾何学的構成に関する二, 三の考察」『美学美術史研究論集』13 (1995b), pp. 1-14.

LAUTIER (Claudine), "Les peintres-verriers des bas-côtés de la nef de Chartres au début du XIII^e siècle," in: *Bulletin monumental*, 148(1990), pp. 7-45.

MANHES-DEREMBLE, Colette, *Les vitraux narratifs de la cathédrale de Chartres. Etude iconographique*, Corpus vitrearum, France, série études,II, Paris, 1993.

SCHMARSOW, August, "Kompositionsgesetze romanischer Glasgemälde im frühgotischen Kirchenfenster," in: *Abhandlungen der philologische-historischen Klasse der Königlich-Sächsischen Akademie der Wissenschaften*, 33/1(1916), p. 5ff.

SCHMARSOW, August, "Kompositionsgesetze frühgotischer Glassgemälde," in: *Abhandlungen der philologische-historischen Klasse der Königlich-Sächsischen Akademie der Wissenschaften*, 36/3(1919), p. 1ff.

SWOBODA, K.M., "Zur Frage nach dem Anteil des führenden Meisters am Gesamtkunstwerk der Kathedrale von Chartres," in: *Festschrift Hans R. Hahnloser zum 60. Geburtstag 1959*, Basel-Stuttgart, 1961, pp. 37-46.

VAN DER MEULEN, Jan, "A Logos-Creator at Chartres and Its Copy," in: *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 29(1966), pp. 82-100.

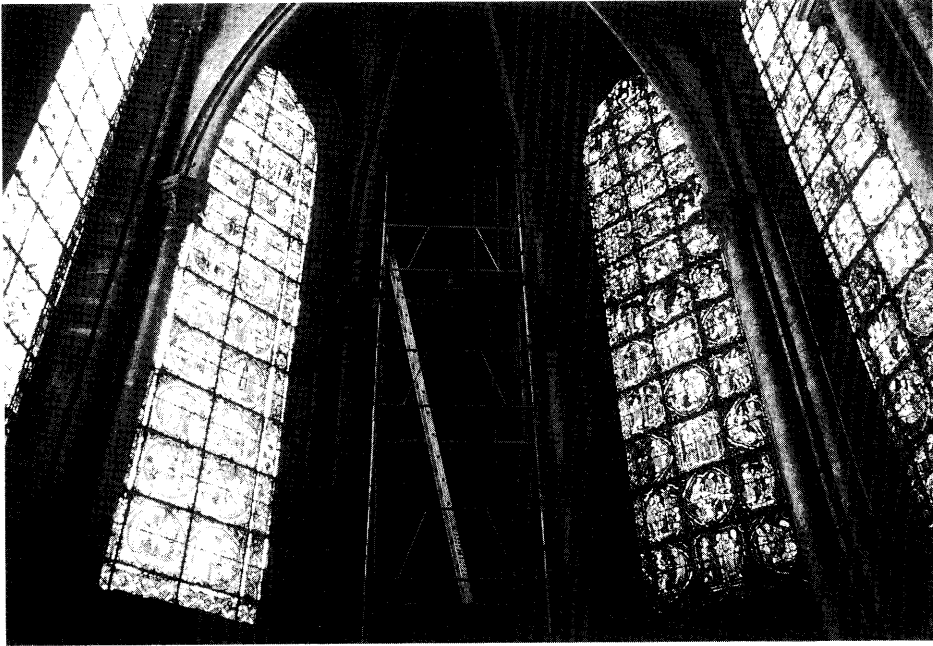
VAN DER MEULEN, Jan, "Recent Literature on the Chronology of Chartres Cathedral," in: *Art Bulletin*, 49(1967), pp. 152-172.

Les vitraux de Champagne-Ardenne, Corpus vitrearum, France, série complémentaire, Recensement des vitraux anciens de la France, vol.IV, Paris: Centre National de la Recherche Scientifique, 1992.

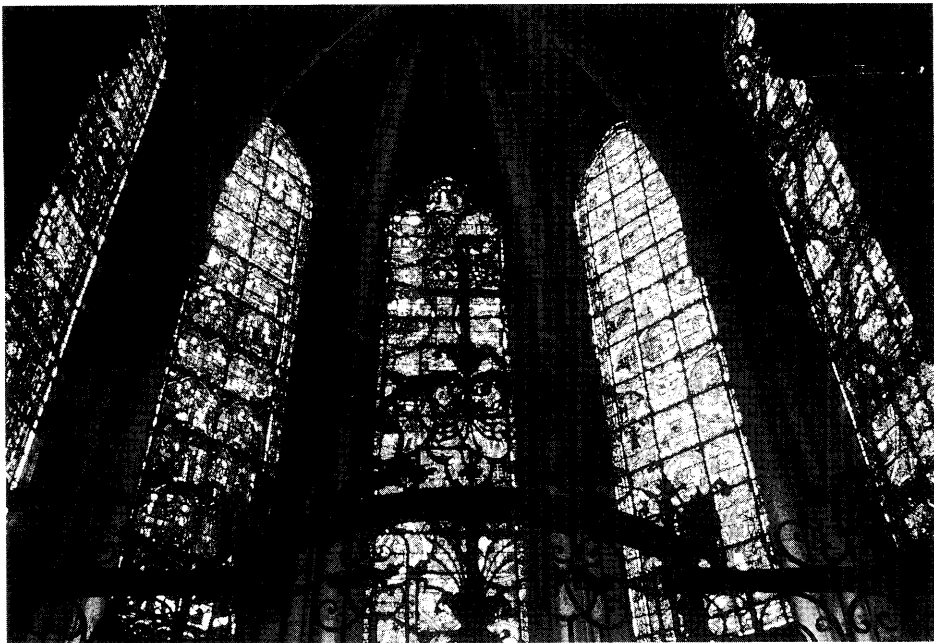
Les vitraux de Paris, de la région parisienne, de la Picardie et du Nord-pas-de-Calais, Corpus vitrearum, France, série complémentaire, Recensement des vitraux anciens de la France, vol.I, Paris: Centre National de la Recherche Scientifique, 1978.

Les vitraux du Centre et des Pays de la Loire, Corpus vitrearum, France, série complémentaire, Recensement des vitraux anciens de la France, vol.II, Paris: Centre National de la Recherche Scientifique, 1981, pp. 25-45.

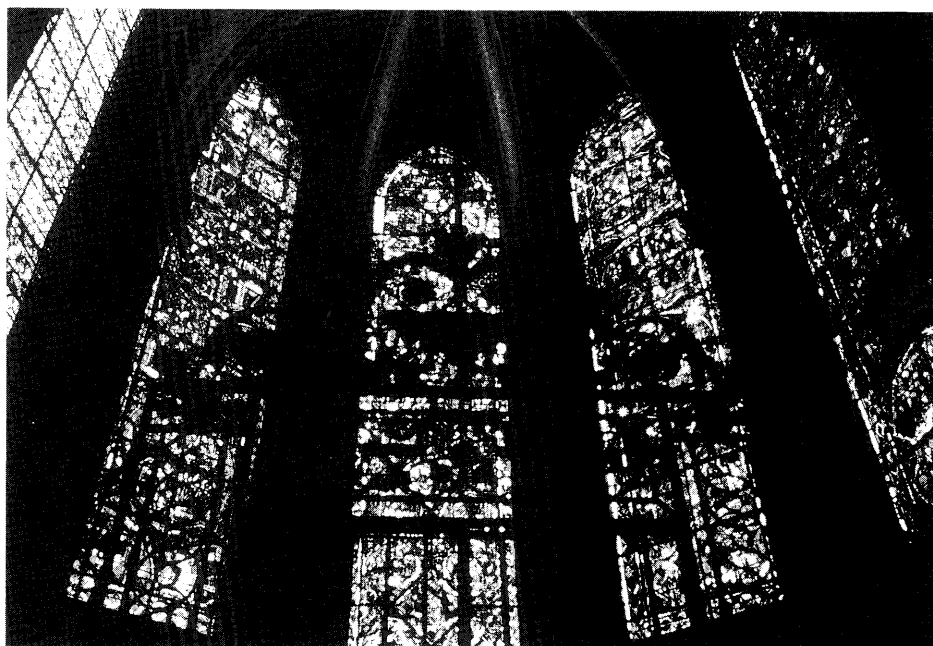
WILLIAMS, Jane Welch, *Bread, Wine and Money. The Windows of the Trades at Chartres Cathedral*, Chicago and London, 1993.



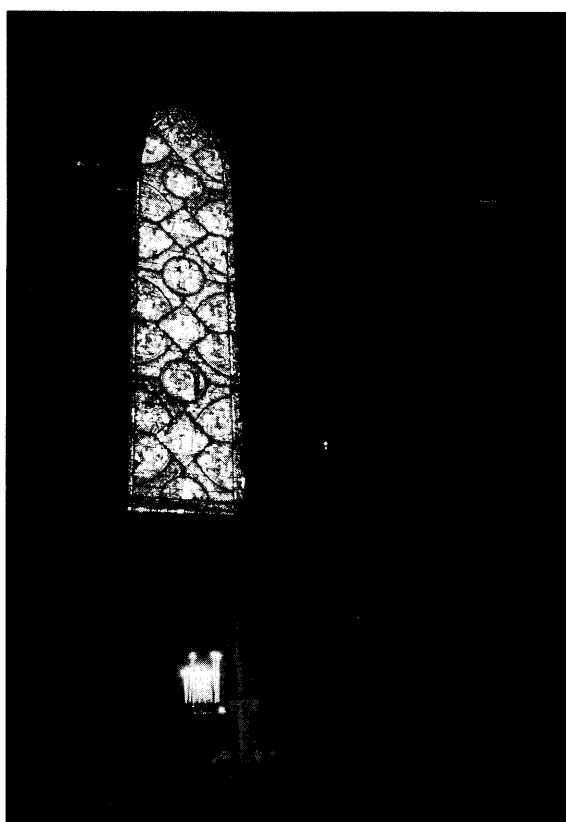
pl. 1 : 内陣周歩廊東端部中央の祭室 (左からno. 3,1,0,2,4)
(ただしno. 0は、現在修復中で取り外されている)



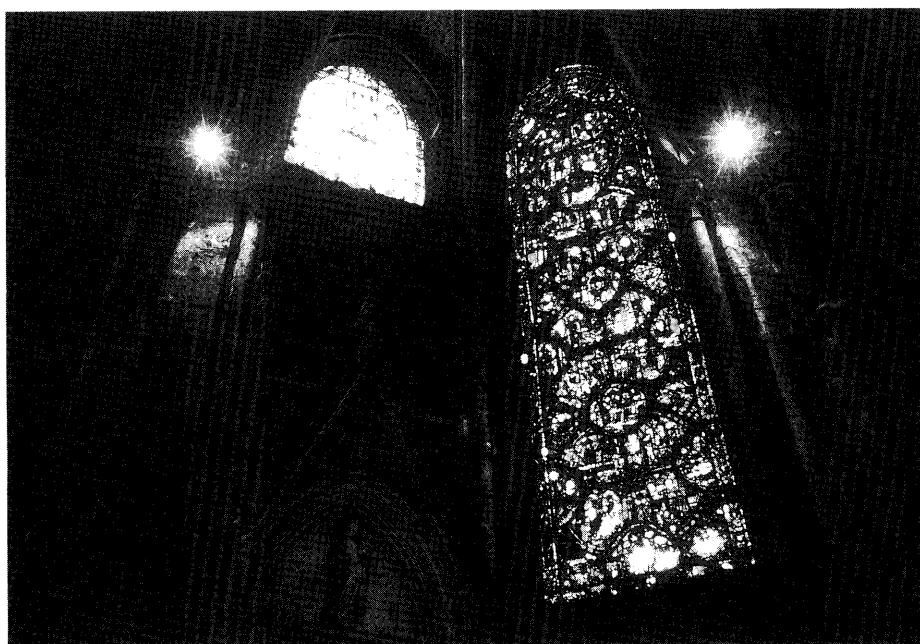
pl. 2 : 内陣周歩廊東端部北側の祭室 (左からno. 17,15,13,11,9)



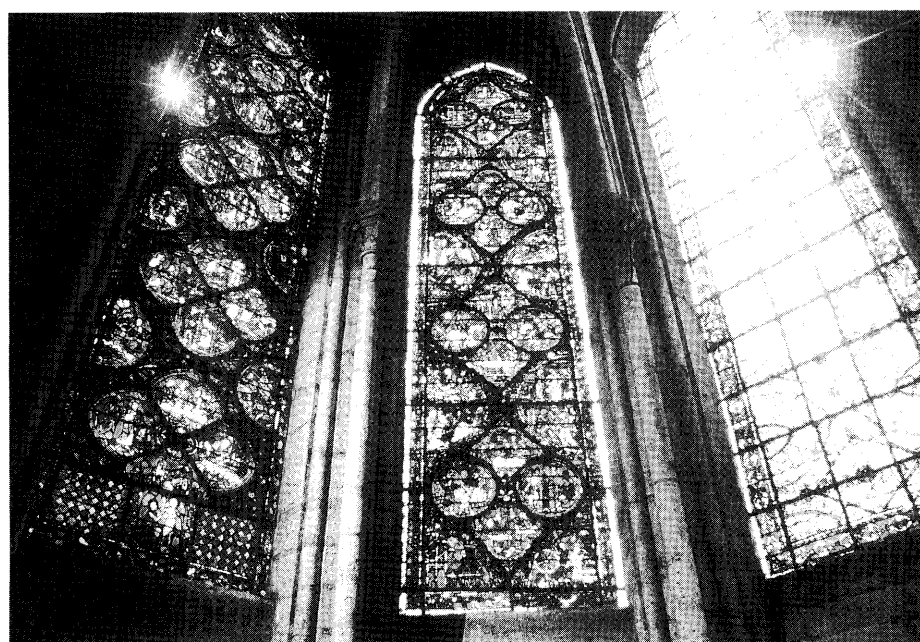
pl. 3 : 内陣周歩廊東端部南側の祭室
(左からno. 10,12,14,16,18)



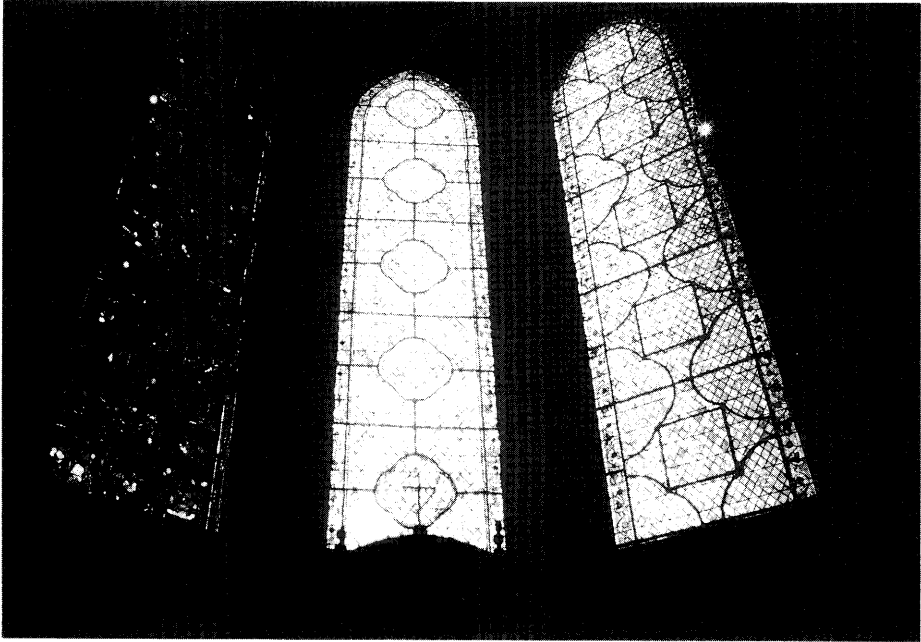
pl. 4 : 内陣周歩廊外壁の窓 (左からno. 7,5)
(ただしno. 5は現在修復中で取り外されている)



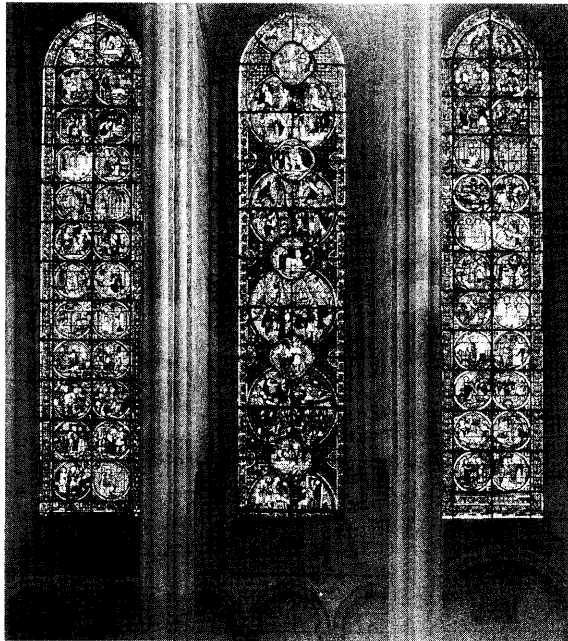
pl. 5 : 内陣周歩廊外壁の窓 (左からno. 6,8)



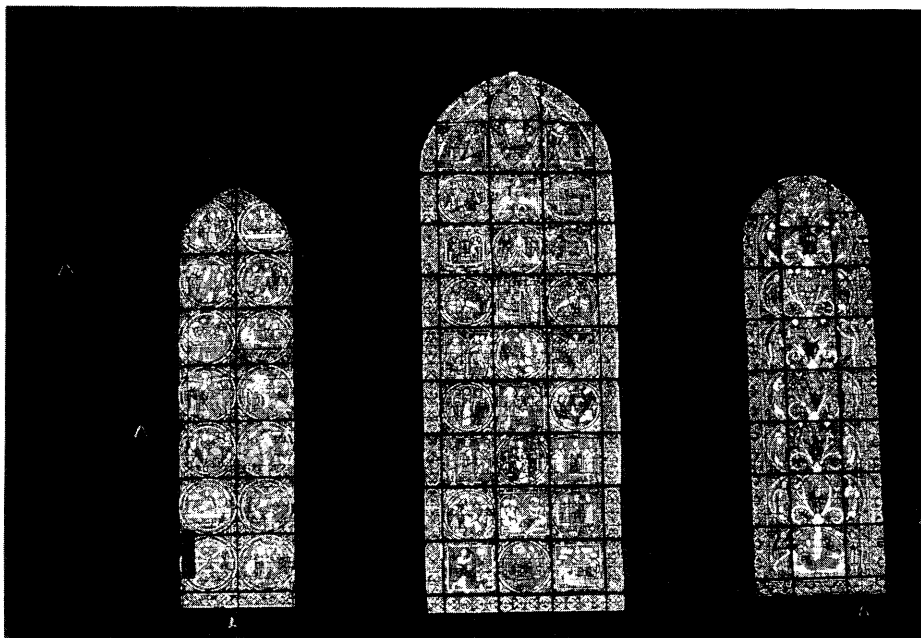
pl. 6 : 内陣周歩廊南北両端部北側の祭室 (左からno. 23,21,19)



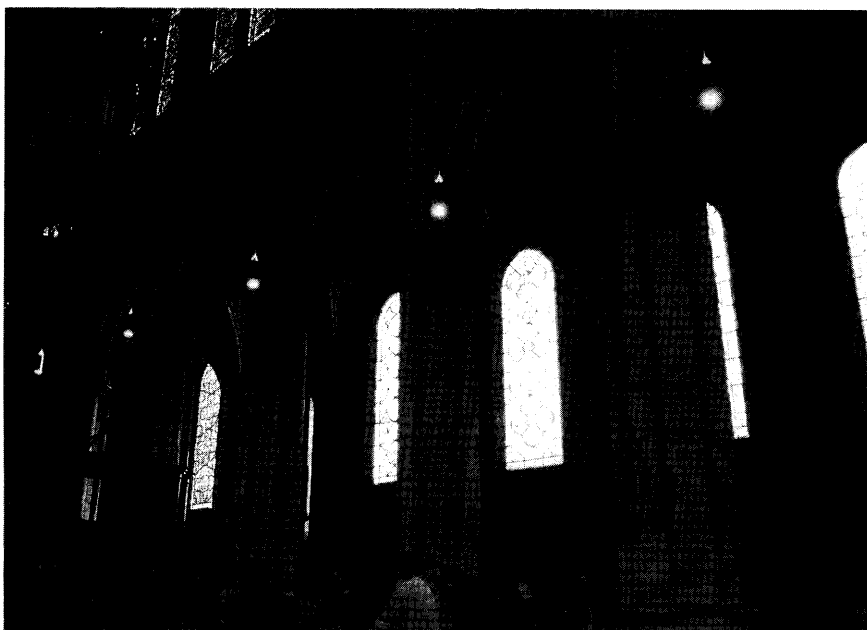
pl. 7 : 内陣周歩廊南北両端部南側の祭室 (左からno. 20, 22, 24)



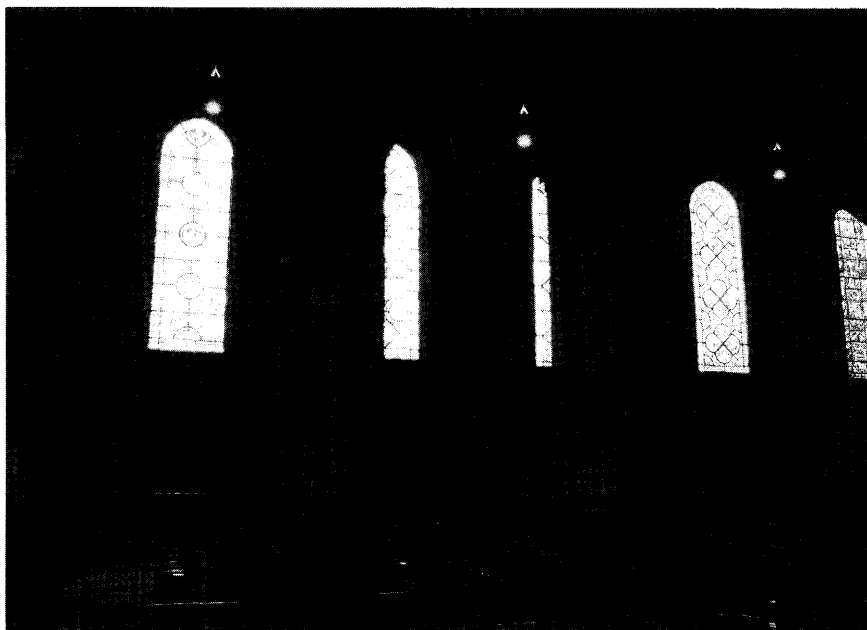
pl. 8 : ランLaon大聖堂内陣の三つのランセット窓



pl. 9 : シャルトル大聖堂西正面 (左からno. 51,50,49)



pl. 10 : 外陣南側廊の窓 (左からno. 38,42,44,46,48)



pl. 11 : 外陣北側廊の窓 (左からno. 47,45,43,41,39,37)